



新板  
繪入

奇傳新話

五

特  
冊 13  
2998  
5



門 伊13  
番 2.398  
巻 5

奇傳新話卷之五

解三愁若半窓貫太入禪定

義經

義に大小ありともども我朝乃人性義子勇んで死  
とてとまて人死困厄の間子とてい信友奸人乃為子  
臨まてるれを力とあつてあまて我報ひ其義と全  
少れ義の大小に誦多く其意を氣移さるべし今昔と  
あんね播磨國赤松家此戲下れ半窓貫太とつる家  
あり身の丈六尺有餘にして臂に幾子釣の力あり  
りや其限と知り志をく武藝に達し一匹踏れとて義  
子とて心英士たり同隊乃中に完栗或然とつるい  
烈しれ武藝にすぐ度く月に立戦功あり天性風雅



奇傳新話卷之五

好く人見温和にして義子立の生得たれを貫太也  
 多幸智音にして他事多く交成ひまじき事なり或は  
 幸に母あが事家定にして附く暴子似るゆりあを  
 戒め母あ又或は温和にして機とんりれ遅く事  
 意外にゆく身と失りんと親して若子公腹とあり  
 一実子莫逆の交あり或は復の比母太川指し出  
 て例乃力帯にゆりせそ大細とひくを清まとり  
 てあまはあ子多く魚を得く奥子家あ川下人  
 折ゆ子一不下卒系多く集つて細と之方なり  
 て一奉して多教の魚は得んとん大勢たぐひたあ  
 りといて卸められれを貫太も細とやめて古本子

腰折りて其手短と思おし居り下卒共十名に  
 張りめて細と奥子一既乃魚も得たりんを大子怒  
 てかくれおとく大漁と僕んあの大漁川上はく教  
 回細を打もる故かくれおとく大漁とゆり居子  
 百なり紙とい久系家久系十命あふ乃細下あり其とり  
 得る魚と悉くあや之候かばさしあつらんたあ  
 い其候子あやと血氣子任せ債着無人子匂りき  
 終を貫太の空あつたて黙し居り下卒系勢  
 以業して七八人押取巻く漁師乃分うて紙とに  
 向ひ礼せざるのこねる一云乃返言せざる鳴呼の  
 者敲さ依せてあつてあや間をくあると貫太

も是れ飛多し古本と云く立むく眼と定めて述を  
 睨み下これ分として茲に對して此れ過言打控  
 て是を改まざる某と敬き依せんあんの執言  
 さうゆりかご一覚悟せよと云ふおふりせとら  
 あらせと十四五人馳集れを貫太かしくとら笑ひ  
 運の足より奴系一人も適任すと飛か系と云んけ  
 ぶが四人とた存子遊倒一二人と掴んで手鞠のごとく  
 砂場へ投飛し控から者共一これ踏倒し十餘人  
 の者共と一集に引寄て砂中に悉く踏付て我の牛  
 窓貫太と云ふ者あり已系某にむくひるふれ難を  
 吐く只今思ひありたりや抑く悔く難言せばさう

許さんとも酒相にや十餘人の者共一同貫太を  
 かくとくより急ぎ久米家の細下と打殺し自  
 己乃弟上立るべ勝手次第なり我く一云のこび  
 すふ公ふしと云ふ牛窓貫太怒り筋もさうね  
 悪人系生し是バツらある悪外と云ふさうく不便  
 をれども打殺し後の妨と除くと側の古本をい  
 とく引拔振あがれ十餘人魂飛んで只慈恩に  
 助きのふしと云ふ慈恩共おからる大本四方に地筆  
 ちく十餘人只一撃に徹塵と云ふく矢きれお笑  
 つくよりあき殺生にあつる奥と確せしと立ゆん  
 とせしあふ二人の侍馳あつて牛窓氏誓く此むく

あらしよは祇とい久米家れ組既友人あり組下十餘  
人只今其君へさうと吐しにらん一同子打殺し  
のまを至極にして祇とい云乃恨ふしとて其下こ  
ちまじとも屋形の卒あり騎士とてとも備奪あり我  
我今日の中うに有のまに新之い其君にも隠路ま  
で歩を連しあぐり裁取の上の歩下知子恨はしは恨  
歩路のため馳走ありといふ子貫太打笑く士の人と  
殺し何をも包かくさんやゆふが路に及ぶに隠路へ達  
すべしゆふ又新之い新之い目前に組下とお  
殺され憤るをあぐり席に友人一撃に命をとるべし  
といふ子友人面笑し其系れおとく顔ははくするあ

いん身祇震動して迎去れを貫太も修くとて立改  
るあまのや半窓氏とてとて馳走あり其あり  
貫太誰ぞとてうりこれを完業成給あり組既友人の  
首掲げて今れ愛事やむとて恨むとてとも十  
教人の卒とお殺して其款上之新之い其そのまに  
いすむをうらむは子備家の然下亦其屋の身全  
らト其上者屋の出立礼服子あはん実は一漢隊を  
ては彼ホがために生と全まをうらむ大太夫か  
織人の教百人と殺傷をたとも行ど子金の身をな  
げしや速子退身して時節を伺うく攻奪あり  
也一我亦力とてうりて攻奪乃計をたすといふ子

貫ちも候と流し是實子公乃論多り思子裁  
 貴兄乃説下のおくおふ果藏子大死子及りん志  
 くらば控縁をた内なり後承承く大恩と謝さ  
 と車子立出る孤或於懐中と探る教星の碎銀と出  
 して車急外子知くつらりれ盤纏ありてぐらださ  
 道途乃費用にそつびだつとありてそれを押して  
 公乃乃湯滄なるおよあつたと怪く交納めて互子千  
 万平安と喝そつて別き去り是より牛窓の縁途  
 につま遠く疾く早く紀丹波と教えそつ若狭子出  
 て野子といひ樹林子却して意子越前園子つり永  
 平寺といひ禪林子あるあつと是く投して是と止

めぬ衆僧あつてんてよりてそつ禪師赤との性乃  
 劉敷本訥と書して公乃能うそつ永く御苗一射と  
 得く再び及赤跡ありてとありきらが貫ちも悪と  
 蒞して室にあらつて安居せり困眼よいふと馳せ野  
 外と細細してつらつ暴悪乃ゆかしてつらつ其雄  
 莊徳偉とつらつ詠人とつらつ合きり一日園守朝倉家  
 乃英士五六人遊獵して此寺にありの体息ありるが行  
 行もも護言して出家に對してかかれおつた大地と  
 づらつ金儀多かたつと志るに其僧乃おつた長袖の  
 したして餘の皆下卒あり今戦國の間士教あるも  
 家賊と奪ん子捕はく去あるとつらつ其甚妙のあり



古傳集言卷之五

五

あつたやうな子僧善くく傍家え来を一抱あん  
 ど抱と懸へ是と人子奪れすと備とあさび自然  
 と傍家と却とかど一故子傍家の苗家の懸あ  
 て人是と求め其意に志とぐんくとあはくらん下  
 士家れゆかると甚是吳あるりありと速れば詔  
 士あ笑つと去る時ハは奪れ詔具財宝皆盜賊の  
 腹と肥とがために設きたるやと匂りもるに費たハ一  
 間子体居るり及ぶがゆふゆひてあつてんかひく  
 禪と却と死寺家に用かあさとあつてんくさつり  
 来る賊ありとも某一人あつて皆貴族却とさす  
 抜く生と金ふあるりあつてん必あやがこのよか

と毫相かく中きれを詔士憤りて足下浪士にして  
 志づらく室に食食して生と養ふあるべし盜賊の懸へ  
 たもあつて一英士あつて軍用のために金強詔具  
 持ちあつて足下も武家よしてあつてんあつてんや費ち回  
 美士とくとも理不あつてん根藩せば即盜賊あり  
 何のともあつてんあつてんを詔士酒ねつて大子  
 怒つて大座に馳出は士あれく誠子我々武あつて  
 んよとつて子貫方何ぞ控懸せん躍り出く詔君一同  
 に某とつてやうともあつてんあつてんあつてんあ  
 らつてんあつてんを詔士其雄偉あるとあつてんあ  
 勝りあつてんあつてんあつてんあつてんあつてんあ  
 抜



間もあぐ切てが家と費なうくくく一こながとのさ  
とうて微笑して立ち入りしれを茲士は是までとたお  
あより細針と竹の若もあぐてに投出し寺家のそ  
あえよしく見のあだ一誠は一時乃戲あり是までよ  
あぐ休息ありの久と立入んすとすは五士一同士  
類かくれおとく恥しめと取てはましくぬるぐらんま  
我くと教して生茶乃恥と清一の久とよ子貫ちさる  
くくと立あ地子安産して士の憤り一旦某がな事と  
恥し方のこの君の輩の厳然なる官人某の賣錢の浪士  
おり今とあり命と給らつて恥と消せんとの一言義者  
の乞感ずふにたえたり士乃武術と争ふ場々の勝と

まのい願ちま子より争いあぐ修練と勝る功子  
あぐだ願する恥しあぐだ誠業は場をれをありまら  
に茲君のまこと恥しれ某大子忠怖れは故子世より  
奉しん性く切傷して茲君乃恥し風雪さの久と思ひ  
切るる面及子て孫子速りれを五士大子感動し降謝  
あぐ貴君の天下れ英雄ありかくれおとれ士と相争て  
其本みと見る士乃誠業は上あり尔來意所死宿  
怒あつて武術の本才と教示と仰くと涙と流しや  
きるに貫たも落涙して各少年にそ恨とこすれて  
其術と励まんといん実子勇士あり某行ぞ湯公子肯  
んやと一朝の鬪詭速に水魚のまうとあれば禪師立

出く士類の猛道つゞだよりとち子感養あつて  
答意一をれを茲士懸謝一牛窓にてい移いよとぬ  
らひして立陶りれを寺中れ僧俗大息して危  
かふ已子修羅道とありんらと我の生急ふ一牛  
窓氏の誠子之雙の力士あり我家れ後掲け上か  
と戒の收び戒の忍れてまよより茲人貫太に應  
對ありとて甚とそれきるとあり極たて寺中  
一夕衆僧集つて牛窓と園との相語りありき  
に貫太ちきるの今や四海戦争れ巷とありて行園  
も旬とて人民安さふか一は地子あり忍れ  
争礼のりたえとてかく人々居と安んぶるがごと

園主乃武徳勝るにやや子一僧ありて君  
乃朝の如く園主乃法平れにやとて今  
や民人これ懸あつてと安んぶるの如く貫太曰  
えつれ懸といふ人僧善とて後山子二懸ありは地  
に一年ありは二懸二年人公安せは貫太曰二懸とい  
べん善曰は後山子一人盜賊乃張本あり荒懸中を号  
く強力暴逆にして人と懸るいと好む是二つ懸あり  
且山後の洞穴は年あり大懸住と時く出く人と懸  
くは懸懸一丈餘にして紐戦弓箭身と懸は是  
二つの懸あり合せて是と二懸といふ貫太曰一年とい  
ぞかの信笑く即君あり君乃姓氏牛窓ありえと外

傳所古史之立

暴行に義かゝるとも人々異相と恐れてさうら  
と安んぜん一年と号する所ありと語りきれば貴  
ち呵くくして笑く曰南不人民の愁とするふ不祇一朝  
れ之愁と解くだ一とふれ流僧駭いて君いんが  
て是と解ん曰自多岐あり功ありて其おまとさるべ  
と難於終く皆く房中に入るお妙ね貴ちの詠人  
の熱腫と考えそく半夜起立く身と固め窓より人  
後山より登りて樹木と多き岩と踏ぐ頂上は登り  
一松樹の生茂りける根子腰打かきて静に窺ひ居  
たり曉方及びびて棟梁より松明と振く大勢の山火  
登るありま先の大漢面夜丑のまじく大かと横之

押纏ひて人とも鬼ともころがら去共後い見り草  
村子居あつて棟梁れ賊中きるい今夜乃働をあら  
冨とあつて一物乃得るふかゝまははあつて洞  
中れ大熊のわりの窺ひ射立く其窓をく下れお教  
とと見の膽皮大あるもののとねんまをく侍合せん  
さつたれ下れ盗人共一同は是良計あり大熊猛と  
つども棟梁の威力に竹を敵せん一人又回さる大の字  
と加えるのこ竹と荒の字に及びんやとつども棟梁お  
うめがさして侍居りり半窓是と笑ひては棟梁一と  
荒熊は相遠く大熊と得んとは大熊あつて一奉  
まゝ我二熊と打教んとかゞと吾んですらうけり

明がさうくあつて山後より地筆さして先とある者  
あり藤子伺ひ見るに一匹の大熊人のぶとくまも其  
形小山乃ぶとく眼の明星と老狐多し歯とあつて  
てあやとあるあつて身の色もよごらつて荒熊足  
ふより多しやれや知して十餘人追とり巻く其間十  
間をうらとあつて一同子月の輪と目高とて射る  
矢先の雨のぶとくとも熊の男にわらふ矢は矢  
かす推きてあつても巖石と射るが如く大熊怒れ  
氣とあつて一死かたき盗と引とく引とく引とく  
紙と破るが如くにして四人あまかく死くお伏し  
たり強盗不恐もつとあつて皆大木と焚きてあつて

大荒熊大子怒く一怒叫く鉄棒とつりあきて大  
熊の頭と打ちいづら其棒とまらりと振り引  
らんとする大荒熊を奪れど金剛力と出くひ  
まらり引くつりあつて捨合もるが大熊力や  
増りきんきん鉄棒と引取きんを牛窓費をあら  
えきき雷乃如く叫ぶ松間より滑り出づる高  
類の働道とつと之かまは熊いたまらる死か  
と引くづり首筋とあ手に極んで一ちち端に  
熊ハ七顛ハ倒してつりあつて矢怒れ  
發して側子揺倒し右をれ足はく月の輪とあつて  
て想刃の力と腸子及びくまひとつりあつて

古今事考

大徳一帯のふりさげんてたら向ら目はより血をか  
 ぐりて立あし死矢より流石の蒼鷹よまはんとて身  
 群執栗一腰ねきて立ちあつた眼とんじり死に  
 と咽く花をさして坐し居たり貫太大音よと  
 己して盗賊の張本蒼鷹よかありも困中れ人民と若  
 りて多くれ財宝と奪取り天罰只今にりては太  
 徳と若子命と断と穿りる髪腫子筆とて其候大  
 地子平伏して助きのあらんとり候と流しをふに  
 貫太赤矢多く出が罷出とせむ謀く我と恨るゆから  
 せと引寄せて着と揚ぎて肥と撃に只一撃に息  
 たるより夫より四方とんじり樹上子迎登りたる

若共と樹木と共よ折倒して残りなく打殺し大  
 木の枝子大徳と仰め付荒徳が既切くさきと緒  
 ひとくおらげて朝日に向く山とわりをらに松人  
 共始終乃働とんじり神裂袈裟死んじ巻く迎取り  
 て其ありさぬと告ぐれば寺中と始民家れ老若太子  
 とららるる終ひてんお運いかなる稲麻竹葺れお  
 とく飛を集り立執んととららるる貫太腕子立ち  
 るりて大勢れ仲太の木と投出きりたはさきたら  
 よりてさきとんじり顔と押へ手と抑くは二徳をか  
 乃おとく平げのふる人間の所業にあはれ一國のさ  
 らい行り世より執人や君へはさく摩利支天の化

身あるべしと一同子昌采一喜び勇をきれば貫ち  
笑く二態とぞ平らりとくとも一年わくも老安  
公あたま一只今は貫ちが形骸とゆふに帰る一集  
アそ公の候子お教るべしとち刀投出大地に坐し  
かれを百姓共慌駭ひて勿辨ふ一許一のととびひ  
きまば貫ちま上りて我昨夜三愁公解んと寺僧  
と細せり大丈夫顔か答へんはゆふ我と教るべし  
を我ちるり刑にべしとち刀取上りて大禪師立  
あて勇士の公地大悟の智識と毫厘もたがらば  
下既子佛縁あんと大乘と會たりと疑ふ一貫ち  
とぞは知得たり何ぞ生命と断ん別子まらば不有

ずや貫ち言下に悟りくち刀取上り一誓と切く禪  
師と二縁一はれを淨師殆歎喜あんと其候伴く若  
願に取り受戒して誓と割を快山と名と給ひはれ  
快山飛とさりて去縁一始く武門と名と給ひはれ  
入不思議乃結縁と認らば貴賤一同子感歎と降  
此亦活佛地とくとも今日初て西箇乃活佛と縁せり  
と一縁子縁伏して落涙か皆くまらばかこれより  
快山座禪の座に入くと喜子美空の位子つとせり  
りや其後廻國して播磨國より一客子喬王に就  
と仰子其身退去の後定業成りも貫ちと退去  
ふさしめり人前へて喜子連累子切腹か

信長はもてく権とありて赤松の家滅亡の徴歴然と  
一く伏山侯と揮く或はが義示れり我活命の  
恩とあるく君乃諺死を救ふりありた交類乃く  
悔愧子堪えんどもも亦行ともさぶらげ人間の世  
在自因縁のありあり何とや熱行とや恨んと念は子  
孫とわし経と誦して懐中れ盤纏教箇の金と強く  
包くもて墓示乃松枝子掛金行方かくありきるが  
の後長門國に山水にまきゆらぐ草菴と結びて  
ひまはして居りしと赤松家れ浪士相見く三熱と  
解きたるお借りと笑く傳えく義談とありり

乞巧智計坂部老道報父仇

國家混亂を尻とえへ偽奸権と執賢者世と適れて  
道と樂しむ偽漢必くかきかみりか子國に賢  
才走しかたんとども用ひざれば其徳公埋れて後世  
にあらざる多し惜むなりとせんり今昔とあんぬ  
小糸氏政嗣長父祖乃業と継ぐ登統の勢道  
関た八剣と平素して万民あびさるるがぬ補佐の  
を居多く臨事と執て戦國中其能國と全ませり  
ふに松田尾張守武功高くとく人され悉と速く  
権勢を強くとく忠義をひね或時郊外へ出く遊  
行し組下れ士七八人誘引して統自強を  
行

とつて一系庵にり 茲士下卒に己が修子鶴伴一  
尾張守と坂本多助といふを切の勇士又石坂平馬と  
りる異惡傷奸の曲者兩人のこころ庵室乃極子  
とて物語りかきるに尾張中平の早雲公業と始  
めい氏徳氏康兩公を母の名おれり尚若子ありて  
関東に於のおとく懐と修子尚志美事大にして四  
海平吾乃賢慮あり某不肖とてどもは君にらひ  
らまてく今や名の上よりあつて指揮をたけ行卒海  
内とて伴一天子と挟んで覇ととりぬる天下靡  
然として敗降せんり疑か一者も提且忠勤と居る  
とよと慢公西子瀧を速りふ坂本多助一徹直家氣乃

武者にりく美君のまへに君とそむいし家のおさく  
と思のの屋を修子れんとよと示ふれども忠臣  
の君子侍る國家と忠として其君の非とひん忠  
臣家司乃公とたりふあり抑早雲公の始業れ祖と  
の豪傑たるる謙か一氏徳云其其業徳く強敵西  
上校と攻はを漸く海内と伸一ぬ其功大あり氏  
康云にりるといふ古今指安れ名將にり甲城のま  
お天下れとや示れしてこそと興定して其武徳  
居さば上校と倒一八公善く堂中に入る先の二代  
傑出して名実とあり世子孫のありて尚主賢あるに  
似くこそ乃武威子にりる附ハ甚くこそなり故子戲



下と思つら茲おも稍後公の事ありて士卒ともの  
 かり其家とららくいくんとあれを代この武功とたの  
 て所公のあり風流と事と武と強んとて只威儀  
 毎舌と好このふ故子改事偏頗多く人々怒をあた  
 凡國家未萌子國害と避く國益と備ふ名將乃公  
 とよるふあり氏康公の行事とんくあねぐ公あり  
 浦り附い目糸の治子眼ありて後來乃害ありゆに公  
 か一天下に正徳とまらるれ其見甚き益あり代  
 乃領國と令くして其備と嚴に天子とまらび霸  
 取乃將ありは好く代結んで天下泰平れ業と補け  
 のり武徳永く子孫に傳へて我と強とて

已た大業と公と又天子とまらば覇者に疎あり附  
 へてかたてして正家妻弱し子孫其領國と令ふそ  
 ぶるありては君へ棟梁の臣ありは意とありて  
 公の正公と戒めありて天性賢明の質忽し正公と  
 のふだ一其不肖とくとも先公乃正馬先子とまらば  
 の感懐とも孫戴して只正家れ解業と思ふより他  
 か一故子慮外も有りては正家存と述るること涙と  
 揮くやらるに尾張も甚憤り惜むとくとも奸曲  
 て大子貴雲一國子直良あり附い其困とらびた  
 實子忠義乃を士ありと嗟嘆ありはれ石塚平馬か  
 らくと笑くと云は乃論故ありはれ先公の附子あり

らき出馬の爲子隠せしむるにやうて頻子先代と称  
して高君と諱ふ何ぞ忠臣とらんや松田君大軍に  
て内倉乃偏論と称しめども某が耳よの始者の諱論  
や笑りり尚附政る偏頗ありといつらある事政りある  
人々怒をもち誰あるぞうらう用ひらまざるを以て  
政事偏頗といひしうらうと恨むにやうて人々怒を  
もちよ否より偏奸乃言語皆は類あり是下りりこ  
思ふべしと述られ兵部居大にあらく由家大切と  
称しぬがを大長に向うく其筋と論は是下其方の  
いとみく某と偏奸といふ武道子拙く武功ありて  
媚論といく登政一其乃勇士と席次同小して國家

の大事と論むるに何とあらうく其事と破せんといふ  
やと眼を詰めて云給は子平其勢に取られてらんと  
閉ふと見く目をせしめて尾張者障子とらんとこ  
れば兵部も公府て是今れおは公は公は逆ひにや  
や障子にふて何小所と卒に抜打に後より肩され  
より一尺をうり切込と心得たりと太刀抜放せと事  
おれはなすう死得どらんそと倒りとたみけく切  
殺しとめとさせば尾張者障子に回より包合と投出  
早く走りぬ一と一云に平馬へ合れしや死一糸に強  
出せり尾張者其候裏より只一人走り出く経路  
と徘徊して水をすよんく観望か居り誌士返

ありておどおど一人はく家内をすあやと同ふに松  
田ありぬ新にく廣室にい兵於平馬と殘して歩  
行しておどおどあり同系にせど替く是ととめたり  
人教も漸く揃ひはくん庵室之報さ食才志さ先  
帰路と取んと同りしてゆき一人の下於笑と愛ト  
て馳來り坂於急於庵室の極子切殺され息たえり  
と新ありに松田大子駭きたる新にくは塚平とい  
りたとい子庵室子一人も人かーと善ふ茲士も動  
轉して松田茲共急さゆき新之の如く兵於死骸  
ありて平馬はんは尻張る歎息して兵於の徹  
の勇士平馬は懦弱乃質争論の上ま報とやくみ

之向ふのかあひがくたき討せりといふくは  
ゆい後病あり情を仕方りねとい子茲士も誠  
志しんと早く是より立ゆり其報と新ありに氏  
政胡長れとつさあひさんそく將たをに暇とき  
仇と打く海糸せよと中渡まきさ名命ありなるお  
に多於が將た迫夜と歩ひて大子駭さ平馬父乃  
仇するに疑ひあけまきバ細限すて報書と差出  
きるに上裁と符合して其候形毎りお麻きれを  
た迎喜よく立出たり世時薩士乃内子多留見を  
とくふお双の智を深き英士ありきるが彼日庵  
室子あり居て松田と遊く一回乃内子かき争論

始終乃中うまくと悉く己笑しと耳同とあきれたら  
 悔りもろが坂が横死とさう情しく松田が奸悪乃  
 きん子尚家と亡れた者いけ人あんと末崩子なす  
 心と安んじらるる水く一封の諫書と認めて執事小  
 糸たろたま子よろく是と執トはわ子退身せり  
 たろたま子歎惜し主膳が退身人の一士死失  
 かと思くとも彼ハ國士乃室意あり情むだされ極  
 け上あしと其諫書と公政胡后上をさるに一覽乃  
 上一言乃廢家敗かくつすく向とく傍居とせし  
 て困甚日と進く由りね玄孫子坂がたぬの東國と  
 りあましく爪子平るが系流子ありと笑く只一

人悲びて上流一高くれたら子あれども其の衆志  
 きざんば是流かく東國一再りて其の亦とせす  
 さんと終途とつと死をたひ引間乃駈子まるとあり  
 て守形にけり至義氣あり者にくとたをとあられ  
 ちをうく我家に困い悲しくせらるに其を迫とた  
 づ終をう或附たを山家と經歷しと降流書にらり  
 林森の如く月光益の如く山笑目と收りめてまら  
 ありしに例子孤打をきて一人の乞丐安坐し  
 て月に嘯き月光の帯に清しとるども附せしと雲  
 霧とれと捨小圃家も又まうり君の垂れしと月光子似  
 たりとるども奸臣の雲霧あうと子其光明とる

向く賢者かきを忠臣横死天の轉愛いんとて  
なすつれと福はあやむととた道安とて是凡  
庸れ人子あつたとはつりある者にく角世乃中  
息ふれやとつりあつたつりあつたつりあつた  
たを眼と定めてつれをたつて目見主膳あり  
て馳より美足つて閑たの賢才仔の罷あつた  
く諸君のまじりやとつりあつたつりあつた  
たをありつれ其候とつりあつたつりあつた  
ありつれあつてかくれとつりあつたつりあつた  
つるの朋友乃縁ありつれとつりあつたつりあつた  
平生のぶつりあつたつりあつたつりあつたつりあつた

ち子悦び父を殺す横死とつりあつたつりあつた  
向子敵乃ゆ束とつりあつたつりあつたつりあつた  
久ももつりあつたつりあつたつりあつたつりあつた  
のぶつりあつたつりあつたつりあつたつりあつた  
て是やれ憤り直あり某令殺す愛死の時も  
ちつく松田とつりあつたつりあつたつりあつた  
とつりあつたつりあつたつりあつたつりあつた  
だましおして其場とつりあつたつりあつたつりあつた  
裏はより交わつて風系親望の折とつりあつたつりあつた  
のぶつりあつたつりあつたつりあつたつりあつた  
と始結おとつりあつたつりあつたつりあつたつりあつた

奇傳新古今

ありて等閑子有るに孝に當代武徳と名ひて云  
 の法則悉く私とすとのを以て諫書紙を其君に松  
 田が好悪念を非業れ災死すを具子認めてたふ  
 たるを以て以て献しりふかまよ公の許容なく松田氏  
 賢と名ひて之を忽諫言乃臨井に居りて人々と  
 うろく還身して今は境界あり先とて祇家に来りて論  
 詠か一人とたをと諫言た也飲然とてあま子  
 俸ひりりんれを山間子幽ある茅屋ありて多指立  
 ぐくた也と請ト四壁か一人とてとも雨露の愁か  
 也湯と煮くあまことあまをた也た也飯苞取出  
 一人とて主客若子管りて多指ナルハ困家れ自敗ら

糾ぐる纏乃如く天令れ自れ古語ありて一甲雲  
 云辛若くして大業と記し氏徳云其縁成徳と漸く  
 特盛にして氏康云乃世子ありて武名八雲に即れ  
 勇果八列と名ひけ時甲我の良将ふくべ武徳四海  
 に溢る一人とて高家子極の良業あり今れ公録業と  
 受く勞せんとて園た子徳を武徳乃是云に及ぶると  
 顧みて却て祖先子紹過とるれ智徳ありとる人た其  
 性乃愚かるにのれ茲將媚編と以て一甲乃善言依  
 以て名おと唱へ依は先代一二の不足と奉て南時法  
 令選裁か一人とて武徳と稱して君公と名ひ  
 此皆茲集りて君公不義子居り入りんとてよる

是是喜敗乃附了きいふり其其困と云とくも  
 帝にんとみく熱とんと涙と流とてかろりん  
 た迎も其智量に服し主家れ喜ゆと悲とて拵  
 天下大乱既子百殺十年行の附ら泰平れ治子  
 治とてやま指回今や礼足とく治子治の附あり二十  
 年と出とて四海太平ありと一た迎回今の茲の  
 中つる乃おふは勤切と云とく主指回其人ありと  
 甲越の二お父乃武徳子れと云とく膳れい人か  
 ぞとく亡ぶたり中国にて元統率して其子孫不  
 育あり九尺の徳澤武威運とくとも天下と春の雲  
 にあつた尾尻の織田上総女大を率にして天下武平

握とるれ勢あり一旦其家滅絶はるくして其人の天  
 性精思あるを大業承く保るありと織田家愛あ  
 らび其戯下れ茲お名武あるを其中にて大業量  
 の將義子とく北事れ大切ありとは礼と結定ありと  
 主今織田家と結んき天子と云とくい分と守つて附  
 節とゆべ大にて霸業ありとく小にて其困去と全  
 くとて一悉隠されおあるとと某が太息ふに不  
 可と語りきんた迎候とていして大あるかか災  
 乃智量惜ひら困家其人用ひらりてとて結  
 談論して聖明眼と若くたを近自結結せん  
 不附主指と拍つて故人子とて種とく乃壽萬

咄く一才藝だるをあるは忘れしうは契山は山賊の  
 屯ありて一人の棟梁あり近來病死して其手下れ  
 中一人の勇士多くの盗賊と伏せしめて今棟梁と  
 ありは者相見か糸家の勇士と名乗るよりし  
 いふ塚平さあらんら下町あつて今青馬ありの我  
 乞馬共とゆく其実吾と今日中は笑ひ居ると  
 了りた近小躍して百一其者平馬あつて大幸あり  
 只貴兄と昔にふ今青馬あり何んとすらんといひ  
 立海り其日の暮ると侍とて侍とて話ひり  
 にも苗見笑く事己すあまり山中は棟梁石塚平  
 馬に相違ありあれども手下れ盗賊百人あれをさ

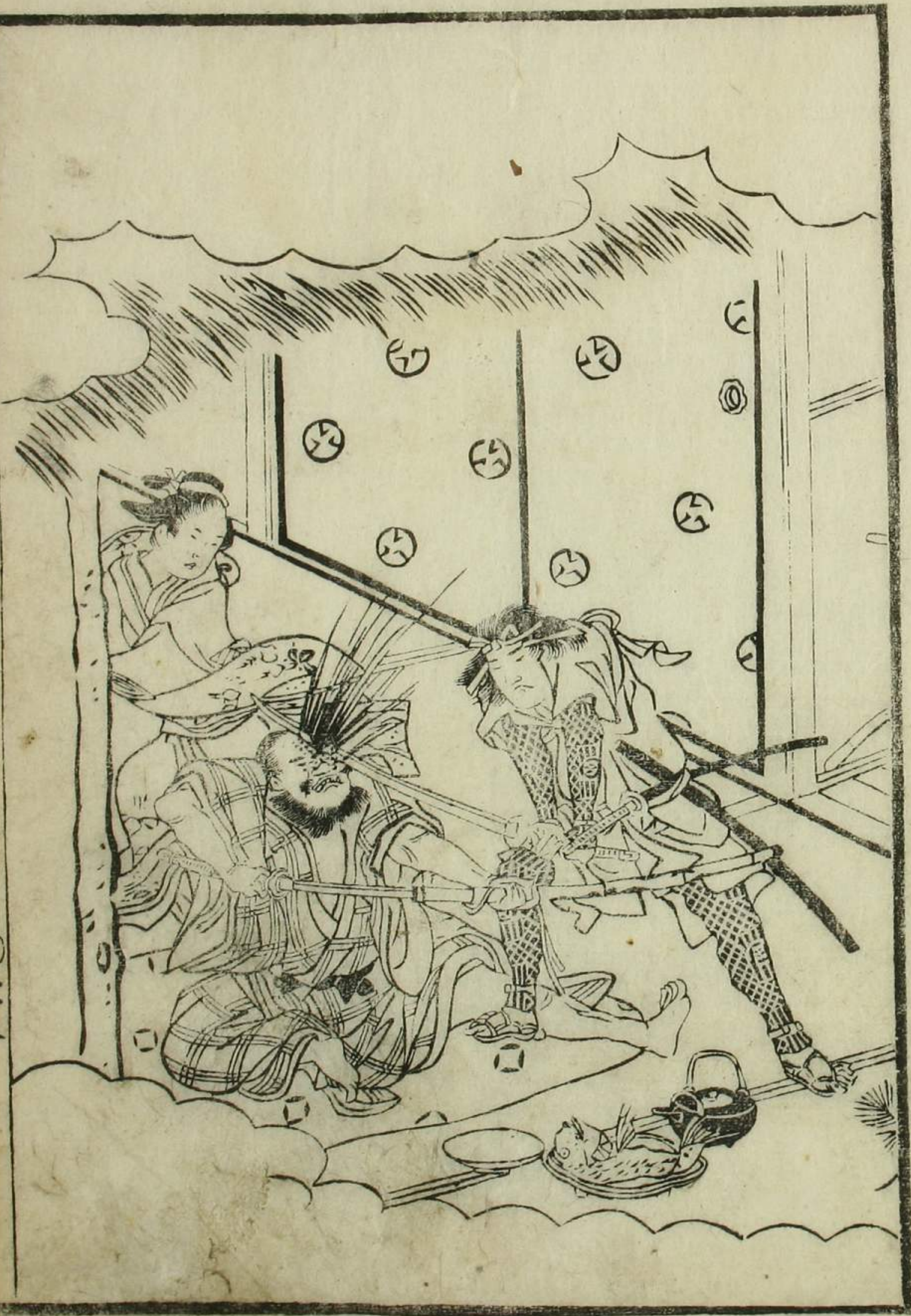
了りたとてただる某二ツ討の賊中れも後血を  
 皆体息して酒毒に日と送り夜い分してあつて悪  
 び入りまらに山陰樹木の上は半鐘と鉤一盃風流  
 客は来あり時は鐘と打て相見とて旅人の不意に  
 物く取とあんとつり其を見えんかたしつ常多れば  
 盗系のえんとさめて乞馬の中は産ひ是に用也  
 其お家の法山のたより来る旅人の先二ツ打て  
 知らせとて又右より来る二ツ打て知らせとて旅  
 人さくあをれをさすせの法は二ツ打十人さるを二ツ  
 二十人よりゆい二ツ打二ツの討は盗十人斗と出二ツ  
 の討は二斗人と出二ツの討は棟梁さるう大勢と



卒して出足山中れ号令あり乞巧れけん源方とつる  
夫のり士類乃果に願志士ありは者に計とさうけ  
てを刃とかりき其某とあびて側子伏し半鐘二ツ  
の相冢とかりき過本出ゆとゆくも言子能くもを  
くくべ知とまんみ疑かりとあ細子能くもにた迫子敵方  
喜してむとふ子其見の計畧にさな懐とをせせん事  
掌中にのり其期又何まの日にのらん主膳點既一と  
明後日必其功と果さんと具子も段と示し合せたを  
い天子まのり妙地してま海り両日と子秋の思ひとあ  
て尚日早朔よりまびりく才園して主膳が室之仍  
にま信もお装束あつためてあつこと笑ひ今日のナ功

何とら疑んと酒と出く兩人怪く吾を一まづらに山  
中へ悪びりりりは附る塚卒よりあ流浪して唯た迫  
ぎつ瓜窠よとをれて彼おにかれあれた伏してあく尚  
山乃滅とあり力もに何せや暴業とかり盗賊の眼  
と驚かし株梁痛死してこれのづらう自己可とあつと  
秋のあつとく出く働き益ハ酒高嬉樂して天上の嬉  
遊と稱し其情欲も何せより一日酒高と信して沈酔  
し如京と閑奥よるびい比お果れ半鐘二ツ鳴しれん  
盗共俄子珍をさうさな及みよる事群倒きておの用  
にま雅なれを亮亮の者共其相冢と信し間もあ  
二ツお鳴せむ中館人己がさあぐに馳出より平馬の

新傳行各美



碎くだ態たてまま鐘かねも耳みみよ入いつたつ嬉うれ樂れに少すこけさししおおううたた迎むか  
 主しゅ獲と人ひと殺ころとをりてて一ひとしてして辨わひひはは案あん下かくく寨さい中ちゆうにに馳ち  
 入いりりににささるる者もの一人ひとりももおおくく虫むし子こ産うままれれ入いりりにに平へい  
 馬まのの女に系けいにに戯たわぶままくく前まへ後ごととああええにに残のこりりのの賊ぞく人ひと系けい  
 縦たて横よこにに碎くだ伏ふししてて正ただ狩しふふききれれたた迎むか太た子こ喜よろこんでんで太た者もの  
 ののををそそてていいりりにに石いし塚づか平へい馬ま邪よこしまにに切き害がいををせせ一ひと坂さかにに去いりり  
 將せうたた迎むかありり逃のがれれぬぬ不ふ覚かく悟ごせせよよとと呼よびびりりににれれるる平へい子こ  
 ののりりてて勢せいををいいてて刀たう揮ひ取とりり上うりりととせせしし一ひとととまま面めん耳じ  
 のの根ねまでで切き込こめめ倒たおれれぬぬとと取とりりてて押おしし止とままりりてて父ちちのの  
 七なな人にんもも向むかひひをを望のぞみみ張はりりてて立たちち上ありり其その隙ひまにに主しゅ膳ぜんのの  
 盗ぬす人ひと共どもとと接ありり切きりりててたた迎むかとと信しんじじひひ山さん路ろととあありりてて立たちち退ひ

きたるに盗人系ぬすひとけいの相あひ見みににつつままてて立たちち出いででききれれどどもも旅たび人ひと一ひと  
 もも死しんんととななれればば怪あやししままるるてて立たちち上ありり孫まご梁りやう始し殺ころすす十じゅう人にん切きららるる  
 是こゝとといいふふとと大おほききののあありりととあありりたた女に系けいにに同どう  
 子こ二人ににのの勇ゆう士しあありりとと仇あひ打うちとと名なをを承うけてて孫まご梁りやう始し殺ころすすりりか  
 くく切きららるるてて山さん路ろへへ引ひ取とりりてて立たちち上ありりととあありりてて立たちち退ひ  
 をを追おううけけてて打うち取とりりとと我われとといいふふとと山さん路ろををせせりり  
 樹ゆ間まととあありりにに乞こ丐がい七しち八はち十じゅう人にん取とりりてて砂すな灰はいととあありり  
 雨あめのの如ごとくく盗ぬす人ひと等らう目めにに入いりりとと十じゅう方ほうととあありりてて立たちち退ひ  
 迎むか主しゅ膳ぜん小せう躍とつととてて太た刀たう先せんととあありりてて立たちち退ひ  
 本もととと倒たおれれたたががおおりりとと十じゅう餘よ人にんのの身みをを下くだりりにに切き取とりりてて立たちち退ひ  
 呼よびびりりててあありりてて立たちち退ひととあありりてて立たちち退ひととあありりてて立たちち退ひ

人いふあれば我に荷擔かきさるにやとふまを乞馬の  
 頭源を平伏して某原のねまよらうとま種と唱し盗  
 人系とあざむき追ふれ掛らんゆと索と仲間と  
 馳集めて危難と救ひなれりと述べたをかざり  
 めくすらうとんで懐中れ盤纏数片の金と却て考度  
 の働にゆらうと思ひの候よ懐と連し道路の難事を  
 さうひのらうゆ思謝の述べさう一筆後の後大恩と報  
 すべし先多くれ人数は一盃の酒とをめんと答りなれば  
 源を揮舞してこれと受仲間と引俣しとちりくりに  
 別去りの是よりた迫主膳が家にいり海山の太恩と  
 謝し後身財と得て子一と報とぐべしといひるに

こころと天運循環して復讐乃功成るる存心の  
 ありによる朋友乃ゆらりかくのおとれ常行ど  
 謝とさうふれたらん貴君早く立向らう仇うらの  
 ひひ強らうとさうと志うれども松田が護口にすつて  
 糸金かゝるゆとあわく止るばかりだその身とそん  
 だんだらうとちやうとまをさうと父祖の武名と  
 わらうとこの流とあやうとた万一はんとあうと四  
 海の中尾原の太守にまうとあまははとく獲足  
 と伸さんよと念比は終端して社とらうとたをい  
 立向らう縁富乃士に始末と語りあまをすでれ懸  
 願とあつと謝しとたらに相忍ましたらうと少糸

たろちまにのりて仇打の中うよとま鑑が智謀深  
きと祐なるにたろちま歎息して多苗んが智量  
新かく信く志をくま公にさくめ奉まことと  
誇人うろにのりて珠玉と泥土にちがひを  
ゆ久し志うれども我ちうろく攻系あさしびど  
且下復讐の功まう子孝にべし我とくより作  
起乃女懐と達し攻系の志ありゆとさうりあ  
かめ志をくま公にさくめ奉まことと  
で中く攻系朝たうろく志よせんうろく益か  
く徳人の志とさうり奸計とみく御志の身の上  
を危ふうろく我片腕と失ふは似れとも志のく

あにぬめぶかあうろく志よせんうろく益か  
ま中りたさうり家名と失ふは似れとも志のく  
あうり織田上総女にほく大御苗附ありゆと  
中をれをた迫涙とありゆと其懇情と謝し  
別まに臨んで主鑑が先見とお借りあはしなれ  
ちま嘆嘆して誠子あ代乃智士ありと称譽あ  
したりゆりた迫の古々にも是ととさうりだ  
に縁ゆくと柴田権六子あしれ縁ありゆと  
織田家に仕官の志と速るに柴田大子悦びゆ武  
勇の上子報仇の功ありまかあうろく序と  
ゆく上総女子うろく志よせんうろく益か

縁とみくは下とかいひきれをた近恵と孫一  
 奉仕たつたりあくやび武運たつた用らるほど  
 るく多苗見主膳が學して一度謝恩のためはさぐ  
 くれいとぬとさふ上総女太子よりさびのひ我一  
 度其智士子相見んゆと彼凡何とぞはひあつて  
 會面ととげいめよく幣物多く賜へた近の夜と日  
 につらききり乃旅籠よりには時山系なるちまも  
 其旅籠子宿して思ひは邂逅して兩人太子よりとん  
 てた近織田家に仕官あらく主命にんくま指  
 に請く一度の會面とたのこ紙さくよくと述べれば  
 た高ちま感して織田家かあつた天下に功とさぐ一

賢者とよのむるあぐりかぶと一志うれども我今  
 日あにさくする幸子幸万苦してまよとつさ免  
 漸く多苗見主膳政系の命をさる書翰或は  
 人とみくまはるといひ主膳がうけざるゆとまつ  
 て紙さくく運まわれり妻藩へはひはらんま  
 叶ふたうらたといふはた近善く何れもま指  
 が世に知るい万人のためあり何れも指をまを  
 家にはひはひはるやと閑話して翌日兩人死を  
 てま指が葺屋へつるに家はその候あつて其人  
 が一入るくまに四句の偈と書紙してまよと  
 一物もか一其偈子曰

仕官元俗物 功業似漂船  
曳尾泥中去 浩然獨樂天

兩人あまを讀くあされんそく扱ハ我こが来りと悟  
ては地と去きうらにやと力と落しあぐく行く居  
たるふ子乞丐の源を海りかり顧どりゆとた迎  
呼久し前日乃働と深く謝して子一の志と望見貴  
版宜取斗あぐ跡りれ者共くも酒食とよめあられ  
也金一封と出しく謹く端りれば源を告ぐ某  
金強一息乃望かるともども多くれ乞丐今日乃露  
命とにふぐれかご一君の端よしんくあれを配分せ  
ハ廣大の慈悲ありとて修く受納く洋謝しと

立ゆと引留めて祇く多留見と辱んために来れ  
ふに其人のあぐ只四句れ偈と残せり貴版其ゆ方  
と志まじりやと同ふ源を笑く前時功ありて師  
某と振きて必尾及相見の両家より祇とよめ  
ある人あらんあぐ不意對甚煩りるんにい志りと  
飄然として立出ぬ某其ゆふと同ども善く  
るあぬ何やとた辱めふとも変して相みるありあぐ  
かたんと云とそく立さりをれを友人とよめさやうか  
く只其智量と称嘆してる子礼謝していつづ  
に立ぬりり嗚呼多めんが胸中いんぞや其識量  
をるぶら其人の公既一毫の恨悔ありとてども

志士側より見る所の時、朽むべきの才あり、何ぞこれ  
に去らんや、去れど、いつて見れば、天下に賢才大徳  
草木と共に朽む者、幾人ぞや、天下の善人らみ  
よられ、能く一よかくのおとらるるあやしむるぞ

奇傳新話卷之五終



